

スポーツ・音楽・お酒事情

フットボールの熱狂

勝利チームのファンがクラクションを鳴らし街中を走る

ラテン・アメリカの人気スポーツはフットボール(サッカー)である<以下、ここでは読者の感覚にあわせて「サッカー」の記述でいく>。サッカー王国ブラジル最大の競技場は20万人を収容し、かのペレ選手にみるように、プロの一流選手は国民的英雄となっている。名門出身でなくても、学歴はなくても、体一つと才能さえあれば“一旗あげる”ことができるからである。

サッカー場はいたるところにあり、広場がすぐアマチュアのサッカー練習場に変身する。まだお尻からオムツのとれない赤子がサッカーボールを相手に遊び戯れるという土地柄なのだ。

アルゼンチンは車でパンパへ取材の途中だった。ブエノスアイレス市内の街路を延々と流れていく市民の群れにぶつかった。私が質問をしようとする前に、それを悟った運転兼案内のアルゼンチンS G IのL君は言葉をはさんだ。

「サッカーですよ。サッカー、サッカー」

この日のカードはアルゼンチンでも最強の2チーム「リベルプラテ」と「ボカ」の対決だという。以前にサッカーの世界選手権が行われた競技場に向かう人波であった。その熱狂ぶりは、さらに競技場外のパンパへの途中で見せつけられるハメとなったのである。



市内の混雑を抜けたところでガソリンスタンドへ寄った。カーラジオによると、まもなく試合が始まろうとする時間だった。給油スタンドには誰もいない。クラクションを鳴らすと奥から給油マンが、せっかくのラジオ中継の聴取を邪魔されて迷惑そうな顔をして出てきた。そしてL君に向かうと重々しく口を開いた。

「キミは一体どっちかネ」

L君は間髪を入れず答えた。

「もちろん、リベルプラテさ」

と、とたんに手の甲を返したように給油マンの愛想が変わった。

「何リッターにするの？」

給油の間、彼ら二人はもう年来の同志の風情でしきりに試合の予測を交わしていた。共に同一チーム「リベルプラテ」のファンだったのである。再びハンドルを握るとL君が口を開いた。

「たまたま私が彼と同じチーム支持でよかった。もし『反対』だったらガソリンは一滴だってもらえなかった。時間もすべり込みセーフ。試合が始まれば客があっても店は閉めてし

まうからネ」

彼は引き続き説明を加えていく。試合終了と同時に市内のいたるところでクラクションを鳴らした車が走り回る。勝ったチームのファンたちだ。親子兄弟であっても、支持チームが反対でその一方が負ければ、しばらくのあいだ口をきかない、というのである。

このサッカー中継をのせて、車はパンパの大草原を時速百キロ以上のスピードで飛ばしていた。

「これは、もし彼の支持チームが負けたら機嫌が悪くなり、ひょっとするとこのスピードに更に上乘せ、やぶれかぶれの運転をされるかもしれないゾ！」

心の通い合った仲間とはいえ、L君だって同じアルゼンチン人としてこのサッカーの血が流れているはずだ。もしかすると・・・」 半分冗談のそんな予感もリベルプラテの勝利で彼の気分も上昇、私にとってもナイスシュートのパンパ行きとなったのはラッキーだった。

これほどラテン・アメリカの市民を熱狂させるサッカーに端を発して、国家間の紛争さえ起こした例もある。中米のホンジュラスとエルサルバドル。お隣同士のこの2国は、サッカー試合の勝敗の不満が因となって戦争に近い状態にまでなったのである。

日本の野球熱もかなりのものだが、これほどに情熱的ではないと思う。攻守交代また投球ごとに間をおく野球と、走り出したら止まることのないスピード感あふれるサッカーとの違いからくるものか、それとも民族自体に流れる血の違いからくるものだろうか。

サンバとタンゴ

激しいリズムで陽気なサンバと人生の哀歓がにじむタンゴ

ラテン・アメリカの音楽を代表するものにサンバとタンゴがある。名前の語呂(語数)は共に3字で似ているが、内容は対照をなしている。前者がブラジル 特に関心はリオデジャネイロを中心 に歌い踊られているのに対し、後者はアルゼンチンの首都ブエノスアイレスのボカスの街で生まれ育った。

人工の近代都市ブラジリアがブラジルの大草原の真中にこつ然と誕生するまで、同国の首都は海岸べりのリオデジャネイロだった。人々はこれを略して「リオ」という。このリオが世界の観光客とマスコミの注目を集めるのが2月のカーニバルである。この時期になると、店も工場も官庁もしまる。人々は数日間にわたって、日本の阿波舞踊りよろしくサンバのリズムに乗って踊りまくるのである。



ブラジルの国旗

サンバ：アフリカ音楽とポルトガル文化が混交

アフリカ音楽の伝統が、北アメリカの機械文明のなかで育ったのがジャズ、そしてポルトガル文化と混交したのがサンバとなった。したがって、このカーニバルの主役は黒人が多い。彼らはこの日のために1年がかりで蓄えたお金を仮装パレードや服飾費に投ずる。

そして日ごろの欲求不満を踊りのなかで解消するとも言われる。

だが、サンバは今、黒人だけのものからブラジル人全体のものとなった。ブラジルの各地にサンバの教習所があり、ブラジルS G Iメンバーが参加する国際的な文化祭などでも、ブラジルを代表する民族舞踊として海外で演じられている。

タンゴ：静かで感傷的なメロディー

さて、はじけるようなリズム、動きの激しい踊りのサンバとは対照的に、タンゴは一般に静かなメロディーでどことなく感傷的だ。タンゴは後ろ向きの歌だと言う人もいる。夕暮れのパンパの草原で、一人でタンゴを口ずさんでいると、人生の哀歓がにじみ出てくるかもしれない。



アルゼンチンの国旗

タンゴ発生の歴史は種々の説があり、正確にはわかっていない。1世紀以上も前に、ブエノスアイレスの下町ボカから自然発生的に現れてきたタンゴは、生い立ちも不詳なのが実情だ。

滞在中、そのボカの更に原点ともなるカミニート(「小道」の意)を訪れ、また一夜『ミケランジェロ』という名前の小劇場で“本場”のタンゴをじかに見、聴く機会があった。ボカはうらさびれた感の港町となり、劇場席の大部分は観光客と年配者で占められ、若者の姿はあまり見受けられなかった。

かつて、いつラジオのどのチャンネルを回しても、タンゴが流れていたものだが、今はその局も放送時間も少なくなっている。オールドファンだと言う中年の紳士は嘆きながら説明してくれた。

「ええ、いつどんな時代でも根強いタンゴのファンはおりますよ。しかし残念ですがこのタンゴは時代から取り残されつつあります。今の若者が好む激しいリズムに合わないのですね。タンゴの演奏家、舞踏家の収入も少なく生活は厳しい。政府もその保持に力を入れていますが、大衆と時代の心がついていけないのですよ」

一般に、タンゴはサンバよりはるかに日本人向きであろうと思う。踊りまくるサンバより、人生の思いにふけられるタンゴの方を日本人は好むからだ。だがそのタンゴが本場で衰退とはいかぬまでも、聴かれる度数が減ってきている。

文化また音楽も時代の反映。“時と共に去りぬ”タンゴか。いや、ひょっとすると愛好者の多い日本が本場のタンゴを継承することになるのかも？！

お酒談義

“水がわり”ともなるビールと多様で強い地酒

少しくだけてお酒の話しをしましょう。といっても、筆者自身いわゆる“飲む”方ではなく、ウィスキーの水割り2~3杯、ビールだったら中ビン1本という程度ですから、お酒について本格的な論議ができる身分ではありません。

もっとも「中ビン 1 本ならいける方じゃないか」と“飲めない”方からは反論が出るかもしれませんが……。さようにアルコールに関する論議はラテン・アメリカでもその飲みっぷり、お酒の種類ともに実に多様性を持っているのです。

パナマではときどき昼にビールを飲むことがあります。といっても、日本で売っている小ビンをもう少し小さくしたものを 1 本です。これはアルコールというより、むしろ食欲増進材の役目を果たしていると言ってよいでしょう。熱帯パナマは 1 年を通じて平均気温が摂氏 28 度。日中は常時 30 度を超えていますから、のどの渴きを潤し、体の緊張を和らげるには水やジュースより効果的なのです。

さて、このビールが他国に行くと旅行者にとっては完全に水がわりになることがあります。水道の水がそのまま飲めないからです。水の硬度や質が体に合わず、生水を飲んだため、たちまちトイレに直行というケースはよくあります。

ガソリンより値段が高い水

ホテルではいわゆるミネラルウォーターを用意し、市街では透明な 1 斗ビンほどの飲料水が売っています。この水が通貨切り下げ前のベネズエラなどでは、ガソリンよりも高かった。そこで、のどの渴きをいやすのに「水を買うくらいなら……」とビールで“一挙両得”を狙うんですネ。

それに私の見る限り、ラテン・アメリカでは飲酒運転に対して日本よりずっと甘い。なにかというとフィエスタ(パーティ)の好きなラテン・アメリカ人のこと。そのフィエスタにアルコールが入らないなんて考えられないのです。

ところが、帰途の路上で交通警察官から例の風船を膨らませられるなどということはまずありません。事故さえ起こさなければあまり問題にしない。“人生最大の楽しみの一つをなんでガツガツと取り締まる必要があるか”といった風情があるんですネ。



セコ(パナマ)、ピスコ(ペルー)、ピンガ(ブラジル)、テキーラ(メキシコ)……

ところで、ラテン・アメリカの地酒も多種多様。まず地元パナマの地酒は「セコ」といいます。これは砂糖キビからとったもので、かなり強い。でも甘くて口当たりが良いのでつい深酒になりがちです。

同じ砂糖キビからつくったブラジルのピンガは更に強く、7 杯飲むと腰が抜け、這って帰らなければならないといわれます。ブドウからできたペルーのピスコも同種の地酒で日本人にもいける口でしょう。

ワイン(スペイン語では「ビノ」という)は、一般にブラジルよりアルゼンチンのものが良く、アルゼンチンよりチリのもが良い。「チリ自慢の 3 W」といわれる中に [W I N E] の [W] が入っています。これは他の 2 W である「W O M A N」(女性)「W E A T H E R」(気候)の後者がブドウ栽培に適した「地中海性気候」であることに起因していると言えるでしょう。

さて、日本でよく知られたラテン・アメリカの地酒といえば、メキシコの「テキーラ」で

しょうか。マゲイ(竜舌蘭の一種)からできたこのお酒はピングと同様かなり強い。このテキーラをもとにしたカクテル「マルガリータ」はとても口当たりがよい。大きなソンプレロ(帽子)に銀や金色の刺繍の入った黒色のユニフォームをまとった楽団マリアッチの奏でる民族音楽に耳を傾けながら杯を傾ければ“我ラテン・アメリカにあれり”との情感を満喫することができるでしょう。

いかにも日本的な民俗風土からの杯の交換

一方、日本の熱燗で「さしつ、さされつ」と口につけた杯を交換し合う、こちらから見れば非衛生的に思われる慣習は「冬」のある日本の気候と「マアママ主義」の民俗性から来るものでしょうか。このあたりは比較文化の論議の対象ともなりそうです。

軽いお酒談議のつもりが、いつの間にか原稿のメーターが上がってきました。ひょんなことから酒の上で筆がつかまざないうちにこの辺で“打ち止め”といきましょう。

「酒は口を軽快にする。だが、酒は更に心を打ち明けさせる」 カント。